

令和7年度 IDE大学セミナー 趣意書

「大学は自らの存在意義とどう向き合うのかー女子大学の選択から考えるー」

グローバル化の進展、加速する少子化、学生の資質能力や価値観の多様化、AI・デジタル技術のめざましい革新、産業構造や労働市場の急速な変化など、わが国の大学はかつてないほど流動的で、複雑で、不確実かつ曖昧な“VUCA”の時代のただ中にある。大学を取り巻く外的要因の急激な変化は、教育・研究や社会貢献、経営など大学のあらゆる側面に大きな影響を及ぼしている。こうした中で各大学は、建学の理念、教育目標、学生の特質や規模、ガバナンス体制、財務構造といった内部的な要素、さらに人材育成に対する社会的要請や地域社会における役割といった外部との関係性に関わる要素など複雑で多層的な諸要素を勘案しつつ、この困難な状況にどう対応すべきか議論と思索を重ねていくことを迫られている。これはすなわち、自らがいかなる社会的価値を持ち、何のために存在し続けるのかという根源的な問いに対し、各大学が真正面から向き合うことを意味する。

わが国の大学は自らの存在意義とどう向き合っていくべきか。この根源的で切迫した問いについて考えるために、本セミナーでは女子大学に焦点を当てる。女子大学は少子化の影響をいち早く受けてきたし、女性の大学進学率上昇や社会進出にともなうキャリア志向、共学志向の高まりといった変化にも直面してきている。また同時に、女性のリーダーシップ育成、理工系人材や地域人材の育成といった社会的要請に答えていくことも強く求められている。女子大学はその特質から、より早くより切迫したかたちで自らの存在意義と向き合わざるを得なかった大学群の1つである。女性の高等教育機会の拡大という理念の下にともに歩んできたわが国の女子大学の前には今、「女子大学であり続ける」、「共学化に踏み出す」、「大学を閉じる」など、大きく方向性の異なる選択肢が並んでいる。こうした選択肢を前に、それぞれの大学はどのような議論と思索のプロセスを積み重ねてきたのか。また、その中で下した1つ1つの判断に、上述した内部的な要素や外部との関係性に関わる諸要素はいかなる影響を与えたのか。言うまでもなく各大学のいかなる選択・判断も尊重されるべきものであり、短期的で限定的な視野や情報から安易にその是非を問うたり評価したりすることは避けなければならない。一方で、各大学がそれぞれの選択・判断に至ったプロセスの諸相から浮かび上がる自らの存在意義への向き合い方を知ることは、女子大学に限らず、この変化の時代において自らの存在意義と向き合うことを迫られるすべての大学にとって示唆をもたらすものと考えられる。

本セミナーでは、まず、高等教育研究の専門家による基調講演を通じて、女子大学や女性高等教育が直面してきた諸課題と挑戦について国際比較の視点から検討する。その後、女子大学やその運営法人において教学・経営の責任者の立場にある方々に登壇いただき、責任者としての、また一人の大学関係者としての目線から話題提供をいただく。そして最後に、全体を通じたディスカッションをおこなうことで、本セミナーのテーマである「大学は自らの存在意義とどう向き合うのか」という問いについて議論を深めていきたい。